

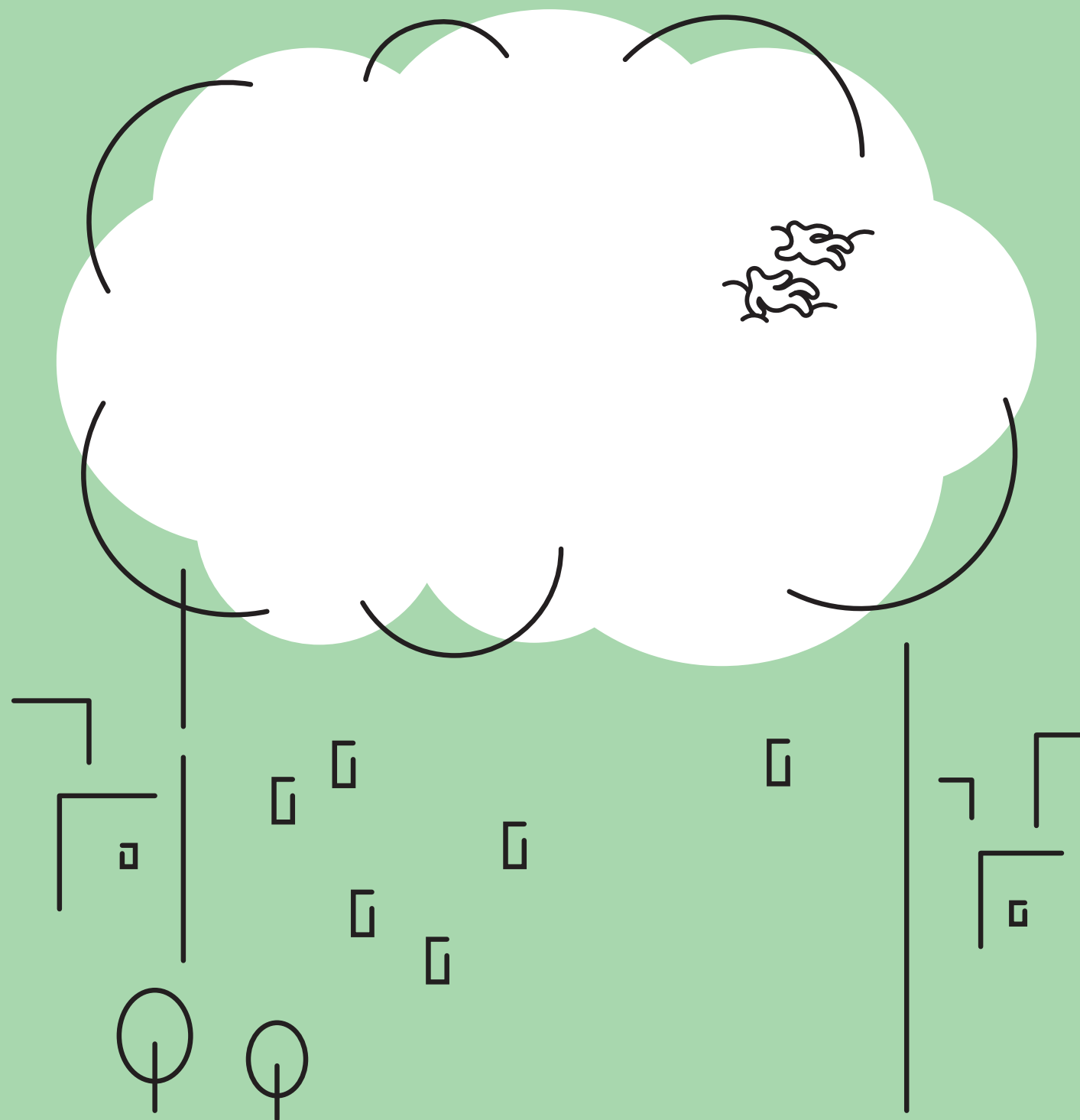
第33回

愛知

まちなみ

建築賞

表彰作品集 2025



そっと包み込む建築が、まちと人を、つないでいく。

DESIGN+ILLUSTRATION いとう かいり (CAMP inc.)

主催 愛知県

後援 愛知県市長会

愛知県町村会

愛知県商工会議所連合会

中部経済同友会

愛知県都市計画協会

中部デザイン協会

協賛

公益社団法人愛知建築士会

公益社団法人愛知県建築士事務所協会

公益社団法人日本建築家協会東海支部愛知地域会

一般社団法人愛知県建設業協会

一般財団法人東海建築文化センター

愛知県建築技術研究会

愛知まちなみ建築賞について



愛知県知事
大村 秀章
Hideaki Ohmura

「愛知まちなみ建築賞」は、良好なまちなみ景観の形成や潤いのあるまちづくりに寄与するなど、良好な地域環境の形成に貢献していると認められる「建築物」または「まちなみ」を表彰することにより、「建築物」及び「まちなみ」のまちづくりに果たす意義や役割を啓発し、もって魅力と潤いのある地域環境の形成に資することを目的として、1993年度に創設し、今年度で第33回を迎えました。

今回は51作品の応募をいただき、これらの作品の中から、建築、デザイン、ランドスケープの専門家、行政で構成する選考委員会において、厳正かつ公平な審査を行い、最終的に7作品が受賞する運びとなりました。

受賞作品としては、「歴史的景観を再現した卯建と唐破風が特徴的な飲食店」「木造の勾配屋根が利用者をあたたかく迎え入れる交流館及び中学校」「シンボル性の高いファサードが特徴的な事務所」「周辺の木々との連なりがまちなみを形成している住宅」「地域の方が気軽に立ち寄れる料理教室等の複合施設」「木造の大屋根とコンクリートブロックの隙間から農村の風景が抜けて見える小さな店舗」「居住スペースを宙に浮かせてピロティ空間を下庭としている住宅」となっており、いずれも良好なまちなみ景観に影響を与える個性豊かなもの

でありました。

受賞されました7作品は、地域の方々から親しまれ、愛される存在となっていくことは勿論のこと、魅力ある景観づくりの好事例として本県の良好な地域環境の形成に大いに貢献されることを期待しています。

本賞に、広くご関心を寄せていただいた県民の皆様をはじめ、熱心に審査していただいた選考委員の皆様、また、温かいご支援をいただきました後援・協賛団体の方々へ深く感謝申し上げます。これからも、魅力的な景観の形成を促進し、愛着と誇りが持てる豊かな県土の形成と、魅力ある地域づくりに取り組んでまいりますので、引き続きご理解とご支援をお願い申し上げます。

受賞作品

- 01 名古屋市指定有形文化財 旧旅籠屋「伊勢久」〔名古屋市熱田区〕
- 02 豊田市若園交流館・豊田市立若園中学校技術科棟〔豊田市花園町〕
- 03 NGK Collaboration Square DIVERS〔名古屋市熱田区〕
- 04 登り庭の家〔名古屋市昭和区〕
- 05 コトづくり研究所〔名古屋市名東区〕
- 06 maison de iida〔愛西市下東川町〕
- 07 篠風の居拠〔名古屋市緑区〕



練り込み技法による記念銘板

作／陶芸家 水野教雄

総評

第33回「愛知まちなみ建築賞」の受賞作品には7作品が選ばれた。ごく簡潔に紹介すると、越境を解消しつつ尾張名所図会に基づく復元的修理を成し遂げた「名古屋市指定有形文化財 旧旅籠屋 伊勢久」、広場・テラス・活動室が地域の関わり代として機能する合築の「豊田市若園交流館・豊田市立若園中学校技術科棟」、地域環境を招き入れる大胆な量塊と皮膜ならびに伸びやかな緑化帯を設けた「NGK Collaboration Square DIVERS」、隣地の庭との連なりをなによりも大事にした引き算の改修「登り庭の家」、新しいコト(活動)自体を売り物としてまちかどに住民を引き寄せる「コトづくり研究所」、田園と集落の際に立地し景観を融合させる立体的作業小屋群「maison de iida」、斜面地の地面を剥き出しのまま開放した下庭が印象的な「篠風の居拠」、いずれも地域形成に資する秀作である。

今回の審査会では愛知まちなみ建築賞の対象とその評価基準について深く議論が交わされた。これまでに累計3000超の応募を数える歴史ある本賞において度々議論されてきたことでもある。その議論では、まちに対する建物の構えだけでなく、空間の接続性の質が重視されるという意見、内部空間であっても公共性の高い部分をまちなみの一部とみなす見解、屋内外を問わず空間の連なりをまちなみと捉える解釈などが示された。加えて、現状、憩える屋外スペースが不足している高密度地区では、特に夏の猛暑などを考慮すると、内部空間の公開性・共用化は時代の要請に応じた方策であると論じられ、また、愛知ならではの地域性を表現することも重要な観点であると確認された。これらの価値観は、近年の応募作品の特徴にも見受けられ、社会的要請と評価軸は表裏の関係にあるといえるだろう。

まちなみの価値は、単なる見た目の問題ではなく、地域社会の固有の文化を反映する仕組みとして捉えるべきである。伝建制度を例に挙げると、その当初では、ある時点での町並みの姿

を保存・整備することが課題とされていたが、次第にその価値判断は、歴史の重層性(時代を投影した差異)を評価する方向へ変化した。建築単体においても同様である。物理的な形態・構造に留まらず、地域社会、風土文化へどのように影響を与え、また反映しているかが評価の重要な観点となる。まちなみと建築は、時間とともに流転する人間生活を表出し、干渉し合う成長体といえる。故に、既存の連続性を回復するのみならず、新たな様相を取入れてまち(なみ)を活性化させる力を秘めている。

このような視座によるとすれば、建築やまちなみを評価する際には、建物の個別性を地域の全体性と照らし合わせ、時間的、社会的、文化的などの側面から多角的に解釈することが求められる。現代のまちは、もはや公か私か、個か群かという二元論では捉えきれない。そうであるならば、例えば、建築とまちなみを交錯させた「半建築・半まちなみ」、情報など異領域を融合させた「超建築・超まちなみ」などと呼べるようなモノがあり得るし、現にその萌芽は垣間見えているだろう。

総括としてあれこれ思いを巡らせたが、審査における評価の明瞭さは不可欠であるものの、従来の観点到固執せず時代を先駆ける価値観を現出させるこそが選考委員会の使命であると肝に銘じたい。最後に、応募者全員の意欲的な取り組みに対して、委員一同、心から敬意を表するとともに、まちなみ建築の今後の発展にご寄与くださることを期待する。



名古屋工業大学 准教授
夏目 欣昇
Yoshinori Natsume

名古屋市指定有形文化財 旧旅籠屋「伊勢久」

なごやしていゆうけいぶんかざい きゅうはたごや「いせきゅう」



旧旅籠屋「伊勢久」は、天保15年(1844)に刊行された「尾張名所図会」にも記載されている建物である。また、現在では常夜灯なども含め、この周辺地域には所々に当時の面影が残る地域の中に、この旧旅籠屋「伊勢久」は建っている。

この建物は、現在に至るまで、災害や戦災での焼失は免れたものの、一部卯建等は焼失していたようであるが、令和5年に一旦解体をし、天保15年当時の復原を目指し、再構築された建物でもある。内部については、主要と思われる部分には古材が使われ、古材等の痕跡をもとに、外観や床の間等も復原されており、かつ、構造面や防災についても現在の基準の水準を

持つ質の高い建築となっており、復原に関わられた方の熱意が伝わる建物でもある。また、この旧旅籠屋「伊勢久」は、今後この地域の「まちなみ」や、新たに建築される周辺建物などに影響を与える事が期待するとともに、この旧旅籠屋「伊勢久」の復原は、まちなみ建築賞にもふさわしい建物であると高い評価もされた。

建築主	株式会社蓬萊陣屋
設計者	株式会社魚津建築設計事務所
施工者	株式会社魚津社寺工務店
概要	主要用途 飲食店
構造	木造
階数	地上2階
敷地面積	323.75㎡
建築面積	122.80㎡
延床面積	223.03㎡

●安藤春久 Haruhisa Ando



1,2,3 photo／ToLoLo studio (2025)



3

良好なまちづくりを進めていくためには、建築物及びまちなみが地域環境の形成に積極的に関わり、一定の社会的役割を果たしていくことが重要であるという認識の下、募集条件に適合しているもののうち、良好なまちなみ景観の形成や潤いのあるまちづくりに寄与する等、良好な地域環境の形成に貢献していると認められる建築物又はまちなみで、次の基準のいずれかに適合し、かつ社会的貢献度の高いものを選考する。

選考基準

1 地域における新しい建築文化の創造に寄与しているもの。

(以下例示)

- 新しいまちなみの形成を先導し、モデルとなるもの。
- デザインに優れ、地域環境の形成又は新しい地域環境の創造に寄与しているもの。
- 周囲への配慮がなされ、地域の魅力を高めているもの。

2 地域のまちなみに調和し、魅力的な景観の形成に寄与しているもの。

(以下例示)

- 地場産品を活用する等、地域の風土を生かし、地域文化の継承に寄与しているもの。
- まちなみに調和し、地域の特色ある景観を創造しているもの。
- 建築協定等の住民の主体的な活動や総合的な計画等により、まちなみ景観が形成されているもの。

3 魅力と潤いのある空間の創造に寄与しているもの。

(以下例示)

- 緑化、せせらぎ等の、地域に魅力と潤いを与える空間を創出しているもの。
- 通り抜け空間や開放ギャラリー等の、地域コミュニティの形成に寄与しているもの。
- 地区計画等の詳細な整備計画や住民活動等により、良好な地域整備が図られているもの。

4 その他、本賞の趣旨に適合し、地域に貢献しているもの。

選考経過

応募対象	愛知県内で、2020年4月1日から2025年8月20日までに建築又は改修等された建築物やまちなみで、選考基準のいずれかに該当するもの。
応募期間	2025年7月1日から2025年8月20日まで
応募総数	51作品
第1回選考委員会	2025年9月1日 一次選考を行い、21作品を二次選考対象とした。
第2回選考委員会	2025年11月11日 二次選考を行い、7作品を決定した。
表彰式	2026年2月3日

選考委員 (順不同／敬称略／★は委員長)

大野 暁彦	名古屋市立大学大学院 准教授
白川 在	金城学院大学 准教授
谷田 真	名城大学 准教授
★夏目 欣昇	名古屋工業大学 准教授
船橋 仁奈	大同大学 教授
溝口 周子	名古屋造形大学 教授
濱田 修	公益社団法人愛知建築士会 会長
安藤 春久	公益社団法人愛知県建築士事務所協会 会長
野々川 光昭	公益社団法人日本建築家協会東海支部愛知地域会 地域会長
片桐 靖幸	愛知県 都市・交通局長
寺本 光治	愛知県 建築局長

01

豊田市若園交流館・豊田市立若園中学校技術科棟

豊田市花園町

とよたしわかぞのこうりゅうかん・とよたしりつわかぞのちゅうがっこうぎじゅつかどう



建築主	豊田市
設計者	株式会社東畑建築事務所
施工者	01／太啓建設株式会社 02／日晶電機株式会社 03／三河商事株式会社 04／花園電業株式会社
概要	主要用途 交流館・中学校 構造 鉄筋コンクリート造一部木造 階数 地上3階 敷地面積 26,164.41㎡ 建築面積 1,418.84㎡ 延床面積 2,704.91㎡

セキュリティ上などの理由から閉鎖的になりがちな学校が多い中、本プロジェクトは地域に開いた構成ならびに河川が隣接する環境を存分に活かした全体配置計画・建築計画が実現されており、高く評価できる。特に河川沿いの敷地の一部を閉館時も開放的な設えとできたことで河川の遊歩道にも質の高い公共空間が提供できていることは、今後の公共事業におけるモデル事業の一つとして広く周知されていくべきだと考え、評価した。また周辺住宅地のスケールに合わせて屋根の勾配やボリュームの大きさについて配慮が丁寧になされており、その点も秀逸である。一方で、外部空間デザインとしては、よりどこに欠ける印象である。滞留空間としての

ファニチャや照明、低木を織り交ぜた植栽など細やかなデザインとなればより魅力的な空間となるであろう。今後は地域や周辺環境とが接続した環境を活かし、より幅広い活用が日常的に実施されることを期待するとともに、遊歩道そのもののあり方の再編についても合わせて検討されることでより本整備の価値が本質的に高まるものと考えられ、注視していきたい。

●大野 暁彦 Akihiko Ono

02



1,2,3 photo／谷川ヒロシ[ToLoLo studio] (2023)

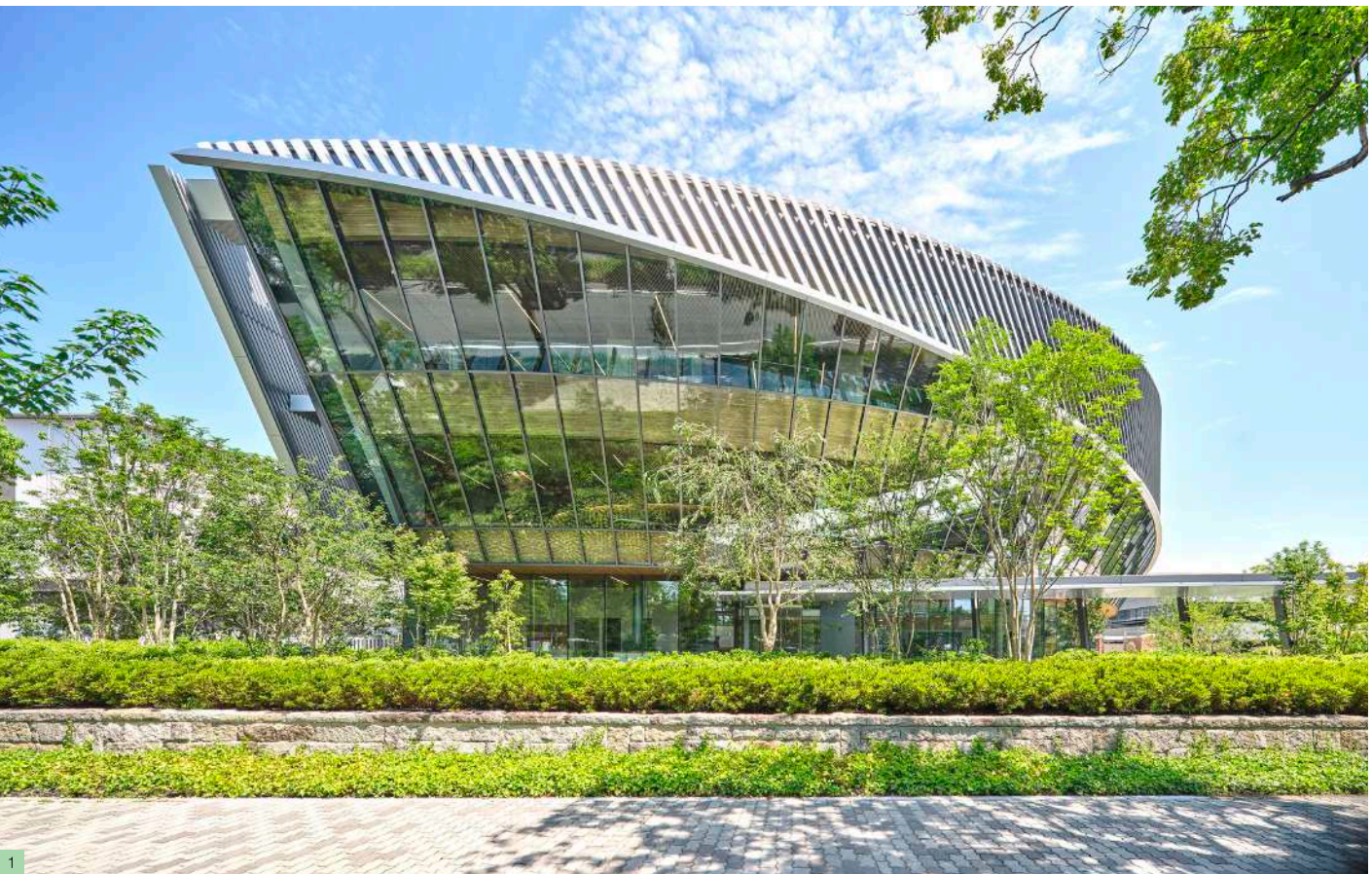


3

NGK Collaboration Square DIVERS

名古屋市熱田区

えぬじーけー こらぼれーしょん すくえあ だいばーす



本建築は、企業のシンボルとしての存在感を示すとともに、周辺環境との調和を巧みに図っている。自然環境を丁寧に読み解いた建築デザインは、下層に向かって斜めに切り落とされる曲面によって特徴づけられ、やわらかな造形がまちなみに新たな風景を生み出している。道行く人の視線においては、下層ほどセットバックした透明感のあるガラス壁面が奥行と開放感をもたらし、その場に広場としての魅力的な空間を創出している。また、緑豊かな前庭は、神宮東公園の緑とつながる起点となり、企業による一体的な緑化が道路沿いに連続して展開することで、新堀川に架かる高蔵橋を経て国道41号線まで緑の軸を形成している。歩道沿い

●野々川 光昭 Mitsuki Nonogawa

には、手前の低木から奥の高木へと配された、歩行者に配慮した厚みのある植栽帯が設けられ、地域の景観形成にも大きく寄与している。建築とランドスケープを通じて、企業の景観に対する高い意識を具現化するとともに、地域環境の向上に貢献しており、その姿勢と成果を高く評価する。

建築主	日本ガイシ株式会社
設計者	株式会社日建設計
施工者	清水建設株式会社
概要	主要用途 事務所 構造 鉄骨造 階数 地上3階 敷地面積 71,537.11㎡ 建築面積 2,145.66㎡ 延床面積 4,426.15㎡

03



1,2,3 photo／鈴木文人写真事務所 (2025)



3

登り庭の家

のぼりにわのいえ

名古屋市昭和区



建築主	木村 哲也
設計者	水谷夏樹建築設計事務所
施工者	01／辻創建株式会社 02／株式会社山門造園社 everyday greening
概要	主要用途 一戸建ての住宅 構造 木造 階数 地上1階 敷地面積 326.83㎡ 建築面積 128.45㎡ 延床面積 125.57㎡

本賞では2次選考用の資料のひとつとして、動画の作成が応募者側に求められている。あくまで客観的に作品を見るために用いられるものではあるが、たまたま写り込んだと思われる道を行き交う人影が、建築と庭、敷地境界を越えて広がる豊かな緑と重なり合う場面には、確かにまちなみと調和し、その形成にも寄与していると感じられる作品であった。

新築から改修へと至るプロセスは複雑で、読み取りにくい箇所もあったが、更地だった敷地をかつての斜面に復元し、大屋根とステップフロアで内部へと取り込む構成や、庭を前面道路へと開く構成には、風景の貸し借りから生まれる良好な内部、外部のつくり方としての

示唆がある。

さらに、時の経過の中で隣地の住まい手が変わり、結果として私的領域であるはずの庭がコモンズとして立ち現れたという事実には、隣地の緑も自分の庭として感じられることを意味しており、現代住宅の自閉的、自己完結型の方向とは逆の、利他的な住環境をつくる可能性がある。

そこに住む人だけが居心地のよい建築ではなく、周りの人々にとっても快適な環境をつくる。こうした考えで建築がつけられたならば、より豊かなまちなみが形成されるのだろう。

●谷田 真 Makoto Tanida

04



1photo／ToLoLo studio(2024) 2,3 photo／MIZAA(2024)



3

コトづくり研究所

ことづくりけんきゅうじょ

名古屋市名東区



名古屋東部の閑静な住宅地に位置する西山商店街は、近隣に小中学校があり子どもたちの通学路沿の馴染み深い商店街である。閉店店舗も見られる中で、本計画が単なる「店舗」ではなく、地域に開かれたレンタルスペースなどとして新たな価値を創出しようとしている点は画期的な取り組みである。外壁のやわらかな曲線は内外の領域の境界を曖昧にしながら訪れる人を穏やかに内部へ誘い、バス停留所の待合として開放したスペースや通り抜け空間を兼ね備えた「コトのみち」は、まちなかに“内部化された公共性”を生み出している。街並みという言葉は一般的に道を中心とした建物、樹木、地形などの一帯となる空間を指すが、

このように内部空間を地域の日常動線と自然に結びつく建築の構えは、まちなみ建築賞にふさわしい新しい魅力を持っていると思われる。さらに、建築家と学生の協働作品であるが、椋山女学園大学の学生が企画・設計・施工を中心に担った意義は大きく、教育とまちづくりが連動した実践的な姿勢は今後のまちづくりに新たな可能性を示しているといえる。本プロジェクトを契機に商店街のさらなる賑わいが育み、学生たちの更なる活躍を期待している。

●濱田 修 Osamu Hamada

建築主	コトづくり研究所株式会社
設計者	01／植村康平建築設計事務所 02／椋山女学園大学生活科学部 生活環境デザイン学科 橋本雅好研究室
施工者	誠和建設株式会社
概要	主要用途 複合施設 (料理教室、貸スペース等) 構造 鉄筋コンクリート造 階数 地上2階 敷地面積 149.28㎡ 建築面積 75.84㎡ 延床面積 145.61㎡

05



1,2 photo／ToLoLo studio(2024) 3 photo／橋本雅好(2024)



3



建築主 ベンチャースタイル株式会社
設計者 株式会社吉村真基建築計画事務所
施工者 有限会社谷口工務店
概要 主要用途 店舗
構造 木造一部組積造、鉄骨造
階数 地上2階
敷地面積 118.28㎡
建築面積 57.70㎡
延床面積 77.76㎡

本計画は、立体分棟型とも言える、酪農の6次産業化拠点施設である。技術・素材・構法を丁寧に組み合わせることで、ひとつの建築の中に複数の「つくり方」が併存する複合性を実現している。この構成により、建築が周辺環境の解釈を変え、風景そのものとして立ち現れている様が高く評価された。

特に興味深いのは、農村地域のまちなみが備えるスケール感や類型、離隔を読み取り、それを建築の構成要素として参照している点である。建築内には隣棟間隔に相当する「隙間」が挿入され、結果として建築自体が小さなまちなみのようにふるまっている。建築と風景の境界を緩やかに連続させ、内部と外部を等価に扱おう

とするこの試みは、敷地周辺に新たな連続性とリズムをもたらし、建築と風景のより深い関係性を示す構造を形成している。つまり、建物と建物の隙間が建築的主題となりうることを示唆している。

なお、本建築における外部空間は、図と地が反転するリバースビリティを内在しており、視線や行為の焦点が状況に応じて変化する。日本の現代のまちなみにおいて、この種の空間的逆転をはらむ構成はあまり多くは見られず本建築が地域社会の活動を受け止める柔軟な基盤となることが期待される。

●船橋 仁奈 Nina Funahashi



1,2,3 photo / 吉村真基建築計画事務所 (2025)



3



小学生が街の絵を描くとき、最近では地面を黒で描くらしい。昔は茶色で描いていた。考えてみると、都市部の住宅街はどこも土以外のもので覆われており、本件の敷地周辺も例外ではない。アスファルト、コンクリート、レンガ、タイル……。敷地周辺を歩くと、公園や造園された庭以外で土を見つけるのは難しい。各住戸に駐車場を配置するためにつくられた「ひな壇の土地」が、さらにまちなみに人工的な印象を与えている。駐車場と胸の高さほどまである塀がやや排他的に感じる中、突然現れた傾斜した地形が本提案の下庭である。まちなみに心地よい開放感をもたらしつつ、雑然と置かれた植木鉢や自転車が、人の外部での暮らしの

自由度を示す。つくられたものではない世界がそこには存在し、土への信頼を思い出す場となる。本提案は、ひょっとすると既存のまちなみに連続するものではないかもしれない。ただ、新しいまちなみというのは、このように始まるのではないか。その発見的な姿勢が評価された。

●白川 在 Zai Shirakawa

建築主 N氏
設計者 01 / 池原靖史建築設計事務所
02 / トミ設計室
施工者 箱屋
概要 主要用途 一戸建ての住宅
構造 木造+鉄筋コンクリート造
階数 地下1階・地上1階
敷地面積 186.96㎡
建築面積 74.52㎡
延床面積 112.74㎡



1,2,3 photo / 関拓弥 (2025)



3